

令和5年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (12月12日実施)	総合評価（3月6日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①主体的で体験的な学習やICT教育を通して、基礎学力の伸長や表現力の育成を図る。</p> <p>②福祉体験などを充実させることで「福祉の心」を育み、他者を尊重し、協働して地域社会に貢献できる人材を育成する。</p>	<p>①ICTの活用等、生徒が学習に対して主体的に取り組み、表現するための方策を継続して検討し構築する。</p> <p>②福祉に触れる機会をさらに充実させ、「他者を思いやる力」「他者から学ぶ力」を身に付けさせる。</p>	<p>①ICT環境や校内外の教育資源、chromebookを積極的に活用し、基礎学力の伸長や表現力を育成する教育方法を継続して検討し構築する。</p> <p>②総合的な探究の時間、選択科目、課外のボランティア活動などにより、生徒と福祉の接点を持たせる。</p>	<p>①chromebookを有効に活用したか。学びそびれの生徒が前年度より減少し、学習に対する姿勢や成果に前向きな変化が見られたか。</p> <p>②生徒の福祉に対する関心・意欲が向上したか。また、ボランティアなどに参加する生徒が増加したか。</p>	<p>①アクセスポイントを全教室に整備した。一人1台chromebookを活用した授業を音楽・社会・総合的な探究の時間等で実践した。12月に1年次を対象として、業者によるスライド作成の手法講習会を実施した。</p> <p>②総合的な探究の時間で、1年次全生徒を対象に全9回の福祉体験講座を実施した。アドバンスタイムでは、デイケアセンターとのスポーツ交流会を企画した。</p>	<p>①chromebookを日常的に活用する授業を増やす必要がある。職員対象の講習会を企画する。</p> <p>②2年次以降も全生徒を対象として、総合的な探究の時間を活用した福祉に係る体験を用意できるという。</p>	<p>①chromebookの活用について、授業での活用だけでなく、学校全体のシステムの一つとして捉え活用することで、生徒が成長する機会を増やすことにつながる。また、職員のスキルの向上にも取り組んでほしい。</p> <p>②福祉の学びは本校の特徴であり、生徒の経験として重要であると考えられるため、今後も継続して実施してもらいたい。</p>	<p>①今年度、継続的に授業の特性に応じたchromebookの活用を実施することができ、主体的で対話的な深い学びを行うことができた。昨年度より、chromebookを活用する機会も増え、生徒の意欲も向上している。今後の課題として、HRや教科の連絡等をclassroomでの配信にて全体に伝わるような工夫を検討していく。</p> <p>②総合的な探究の時間で1年生全員を対象に福祉学習に取り組むことができた。今後も福祉体験を通じた学びの内容を一層充実させるよう検討していく。</p>	<p>①一人一台端末等をはじめ、生徒のICTの活用を、今後より一層進めていく。それに伴い、生徒が授業だけでなく生活の一部として端末を常に所持し、活用する場面を増やしていく。また、思考力・判断力・表現力を伸ばすために、発表や話し合いの機会を増やすとともに、指導と評価の一体化を進め、生徒が自身で学習改善に取り組むことができる仕組みを模索する。</p> <p>②「福祉の綾西」の強みを活かしつつ、デイサービスセンターとの交流をより一層深めていく。また、総合的な探究の時間については、学校全体で福祉体験の目的を共有し、体験を通じた学びの内容の充実をはかっていく。</p>
2 (幼児・児童・)生徒指導・支援	<p>①個々の生徒の特徴や傾向を理解した上で指導に当たり、生徒の自己指導能力を育成することで問題行動の未然防止を図る。</p> <p>②多様化の進む生徒の特性を多面的に理解し、生徒個々の教育的ニーズに即した、より適切に必要な支援体制の充実を図る。</p>	<p>①生徒の自己指導能力を育成するために学校生活のルールを明示化及び、交通安全教育の推進を図る。</p> <p>②SCやSSW、スクールメンターや外部機関との連携により、職員全体で活用できる教育相談体制の充実を図り、周知、共有する。</p>	<p>①学校生活におけるルールを精査し、明示、徹底するとともに、計画的に交通安全教育を行うことで、交通事故を減らす仕組みを作る。</p> <p>②生徒一人ひとりのニーズや特性に即した教育相談体制「綾西支援モデル」を充実させ、活用できるよう整備する。</p>	<p>①学校生活におけるルールが浸透しているか。交通安全教育の推進により、交通事故、特に自転車事故の発生件数を減らすことができたか。</p> <p>②「綾西支援モデル」に基づいたケース会議の開催件数、及びフードバンクなど外部機関との連携回数。</p>	<p>①授業中に携帯電話が鳴った場合の指導を精査し、明示、徹底することで、効果的な指導に繋げることができた。</p> <p>②年度初めにSSWの仕事についての説明を行った。フードバンクを活用した食料配付を1回開催した。ケース会議も1回開催した。</p>	<p>①計画的に交通安全教育を実施できているが、継続的な意識の醸成に向けPTAの合同交通安全指導を強化し、PTAも巻き込んだ活動をさらに進めていく。</p> <p>②フードバンクを活用した食料配付は、学期に1度程度で実施する。必要に応じてケース会議を開催する。</p>	<p>①自転車による通学生が6割程度いるので、事故の予防だけでなく事故が起きた際の対応を含めた指導計画を検討してもらいたい。</p> <p>②地方公共団体だけでなく学校としてもフードバンクを活用することは、食料の配付が広がることにも、フードバンクそのものを周知する一助となると思われる。</p>	<p>①学校生活におけるルールを精査し、明示、徹底するとともに、計画的に交通安全教育を行うことで、交通事故を減らす仕組みのベースは作れたが、細部のルールの浸透や、生徒が適度に過ごしてしまう場面もあるため、いつでも面接に挑める学校生活のさらなる定着に向け工夫していく。</p> <p>②SCやSSW、スクールメンターの活用を円滑に行うことができた。役割の違いについて、職員の理解に課題がある。フードバンクを活用した食料配付は毎学期末に実施できた。ただの食料配付とならないようフードバンクの周知に向けた工夫が必要である。</p>	<p>①全教職員が同じことを生徒へ伝えることが大切なため、教職員への研修を今以上に丁寧に実施する。また、校内の駐輪指導を実施し、体験型講習会など、交通安全教育を一層充実させることで、校外の生活に生かせる土壌をつくる。</p> <p>②SC、SSW、スクールメンターの違いやそれぞれの役割について、改めて理解を深める機会を設ける。フードバンクに関するチラシやポスター等を活用して、生徒の目に触れる機会を増やすなどの工夫をする。</p>
3 進路指導・支援	<p>①基本的な生活習慣や基礎学力を伸長し、多様性を強みに個性を伸ばすキャリア教育を推進する。</p>	<p>①生徒一人ひとりが社会的・職業的な自立に向けて主体的に取り組むような仕組みを工夫する。</p>	<p>①-1 学年進行に適した進路支援ツール等（適性検査、小論文ワーク）を活用し、生徒の主体的な学びを推進する。</p>	<p>①-1進路支援ツールの活用状況。</p>	<p>①-1 小論文ワークを授業内で活用した。今後スタディサプリ for SCHOOLを導入し、生徒の主体的な進路選択活動につなげる。</p>	<p>①-1 今年度新規に導入したツール（小論文ワーク、スタディサプリ for SCHOOL）の効果測定を適切にする必要がある。</p>	<p>①-1 小論文ワークなど新規に導入したツールを今後の指導にどのように生かしていくのか、教員全体での共通認識をもつことが必要である。</p>	<p>①-1 自己分析を中心とした小論文ワークなどを導入することで、生徒の進路意識を高めることができた。今後は新規導入ツールの活用をはじめとする3年間のキャリア教育を整理していく必要がある。</p>	<p>①-1 自己分析の方策は、必ずしも小論文ワークに限らないことをふまえ、今後も生徒の進路意識を高める効果的なツールを模索しながら、3年間のキャリア教育を整理していく。</p>

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (12月12日実施)	総合評価(3月6日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		②特性による学習上又は生活上の困難の改善、克服を目的とした通級による指導を実践する。	②生徒の個性や特性を理解し、通級指導や教育相談をはじめとした支援システムを利用し、生徒一人ひとりに応じた支援体制の定着を図る。	②生徒の特性を理解した支援体制を構築するとともに、SC、SSW、メンターと連携し、特性に応じた支援システムを全職員で推進する。	②通級による指導や教育相談活動を全職員で推進し、個々の困難を改善させることができたか。 ②学年、SC、SSW、メンターの情報が共有されているか。	①-2 インターンシップの参加人数は例年並み。アドバンスタイムのシユークツ講座は企業連携等を行った結果、参加人数が増え、主体的な取組みがみられた。 ②通級運営委員会、教育相談会議、学年会等で収集した情報をそれぞれ会議で共有している。SC、SSW、メンターとの情報共有として担任や教育相談担当に報告書や口頭でフィードバックした。	①-2 インターンシップや仕事の学び場等、外部施策の活用を強化し、生徒の参加意欲を引き出す広報活動を行う。 ②個々の困難の改善については、授業担当者や通級運営委員会や教育相談会議を活用して、継続して検討を行う。	①-2 地域の方へ職業に関するインタビュー等を行うなど、生徒が進路を自分の問題として捉える機会を設けることで、生徒の参加意欲を引き出すことにつながる。 ②個々の生徒の困難について、教員間で情報共有が行われ、支援する体制が整っている。	①-2 企業連携等の新たな試みをした結果、生徒の主体的な参加が増加した。今後は、さらに外部連携を強化し、合同企業説明会の全生徒参加や高大連携協定等を実現し、生徒と社会との関わり場を増やし、より良い進路選択につながる支援を行っていききたい。 ②通級運営委員会、教育相談会議、学年会等で収集した情報を共有できた。また、フィードバックもその都度実施した。情報共有後の生徒への対応に時間を要してしまう場面がある。また、個々の困難の改善については、継続して検討が必要である。	①-2 企業連携等の新たな試みを継続しつつ、今後もさらに外部連携を強化し、合同企業説明会の全生徒参加や高大連携協定等を実現するとともに、外部機関主催の進路説明会を活用することで、すべての生徒がより良い進路選択ができるよう支援していく。 ②情報共有後の生徒対応に向けて、SCやSSW、外部機関など活用できる資源をまとめて共有できる形を作る。個々の困難の改善については、教員の知識やスキルの向上に向けて、研修や「NISE 学びラボ」の活用を試みる。生徒がどこでつまづいているのかを整理して、個別に支援できる仕組みをつくるのが望ましい。
4	地域等との協働	①生徒の活動の質の向上を図り、生徒主体の地域貢献活動を推進し、未来社会を生きるために必要な力を育成する。 ②PTAや地域と協働・連携して活動する場を増やし、社会性や連帯性を身に付けることにより、地域社会に貢献する意識を高める。	①生徒会活動・部活動、学校行事において、地域と連携した生徒主体の活動の場を設けることで、生徒に主体的に活動する力・判断する力を身に付けさせる。 ②PTAや綾瀬市など地域との連携を図り、生徒の活動の中で出た意見や課題を教育活動に反映する。	①生徒会活動・委員会活動・部活動の活性化を図るとともに、地域貢献活動を計画し、生徒が主体的に活動する場を充実させる。 ②PTAや綾瀬市など地域と連携した行事や自治体との協働による行事に積極的に参加する。	①生徒会活動・委員会活動・部活動において、生徒が主体的に体験活動を計画して参加することができたか。 ②地域と連携した活動に積極的に参加することができたか。	①各種のボランティアや地域行事に対し部活動や委員会での積極的な参加ができた。行事の企画はできないものの、参加の内容で主体的な工夫を行った。 ②校内美化活動や文化祭、交通安全指導関係でPTA役員と教員・生徒との協働を果たすことができた。また、地域清掃活動も行い、例年になく充実した活動を行うことができた。	①受け身に参加するだけでなくボランティアや地域との交流や地域に貢献できるような企画について生徒会役員を中心に企画立案するような工夫が必要である。 ②活動に参加する方々が固定化されつつあるため、活動日程や内容の検討や目的、効果等の検証を今後行っていく必要がある。必要に応じて活動内容の精選を図っていく。	①地域との交流は生徒だけでなく、地域の人々にとっても良い刺激になっている。生徒が積極的に参加できるよう検討しながら、今後も継続してほしい。 ②生徒の参加を広げるため、生徒が自分事として捉えるための方策を検討することが必要である。生徒が行事を通じてどのよう成長してほしいのかを改めて意識させることで生徒の積極的な参加につながるのではないかと。	①市役所との連携や近隣中学校との交流など地域の行事に対する積極的な参加を引き続き目指していきたい。一般公開の再開した文化祭などを利用して新たな交流や貢献活動を模索していきたい。さらに本校活動の地域への発信についても検討して実行できる模索していく。 ②新型コロナウイルスが5類に引き下げられ、昨年度に比してより通常のPTA活動を実施することができた。また、制限されていたデイサービスセンターとの交流や避難訓練等での外部機関との連携を果たすことができた。一方で、コロナの影響で実施していた活動を見直していくことを含め、PTA活動や地域との協働の活動を来年度に向けて精選していく。	①デイサービスセンターの利用者を引き入れた小学生対象のサッカー教室や綾瀬市との連携、近隣中学校との交流などにみられる地域連携は、本校が地元から必要とされ、愛されるために不可欠な取組である。このことをふまえ、今後もより充実したものになるようつとめていく。 ②新型コロナウイルスが5類に引き下げられたことにより、通常のPTA活動やデイサービスセンターとの交流を再開する契機となったことはプラスであった。学校、PTA、地域の連携の拡充をはかり、開かれた学校づくりを通して、教育活動が一層充実したものになるようつとめていく。
5	学校管理 学校運営	①学校運営協議会委員をはじめとした多様な人材の意見を集め、社会に開かれた安全で安心な学校づくりを目指す。 ②組織的、計画的、継続的に校内研修を行うことで、教員一人ひとりの資質と学校の教育力の向上を目指す。	①社会に開かれた安全で安心な学校づくりに向けて、学校運営協議会を活用して教職員の意識啓発を図る。 ②教員の資質及び教育力の向上を目指し、支援教育や人権意識を高めるための校内研修を行う。	①学校運営協議会や学校設置部会において、意見聴取や情報収集の機会を設ける。 ②支援教育や人権意識に係る研修に取組み、知識やスキルを体得するとともに、それらを校内で共有するシステムを構築する。	①学校運営協議会や学校設置部会からの提案を実現することができたか。 ②支援教育や人権研修に積極的に取組み、教育実践に活かす知識やスキルを体得できたか。また、それらを校内で共有することができたか。	①学校運営協議会や学校設置部会からいただいた意見を参考にして、まえ向きに取り組んでいった。 ②人権に関する研修を実施した。また、通級運営委員会については、「NISE 学びラボ」を活用した個別の支援研修を実施した。	①学校運営協議会及び学校設置部会からの提案に各会議前に意見を集約するなど効果的な協議会や部会の運営のあり方を検討する。 ②「NISE 学びラボ」による研修の実施範囲を職員全体に広げる。	①学校運営協議会について、生徒や学校の状況を知り、意見交換を十分に行うことができていた。この機会をより効果的なものにするよう検討しながら継続してほしい。 ②人権に関する研修については取り組みが十分に検討され実施されている。今後も持続可能な形で継続してほしい。	①学校運営協議会では、肯定的な意見を数多くいただいた。来年度に向け、生徒の様子の変化や社会情勢の変化が起こりうるため、引き続き風通しの良い学校運営協議会の運営につとめる。 ②人権研修については実施した。内容については、校内の課題についても認識していく必要がある。教育実践のスキルや知識体得に向けて、「NISE 学びラボ」の講座受講に向けた環境整備を行った。今後は、講座の活用に向けた取組みが必要である。	①学校運営協議会をはじめ、学校内外の資産を有効的に活用することで、教育活動の見直しと改善につなげ、学校運営が生徒にとってより充実したものなるよう、取り組んでいく。 ②人権研修については、教員に対するアンケート等を実施し学校の実態に合わせた内容を次年度以降も検討する。「NISE 学びラボ」の活用に向けて、おすすめの講座を共有するなど教員間での活用を充実させる。